

## 大塚楠緒ぬしを憶ふ

先程は参上、色々御話ありがたく候。あれよりただちに、大塚様へあがり申候。博士には御客様との御事にて、しばしお二階にて、御待ち致し候。日の光のあかるくさし入り候にも、「我心くもりたる程は日の光も曇りてあれ。」といつぞや楠緒様の仰せられしを思ひいでて、げにもわが今の心にはと、一人しみじみ思ひ居候所へ母君御出にて、さまざま亡き君の御病中の御話など候ひき。如何なれば今一度は見奉らざりけんと、口惜しき悲しき我が私の思ひはさてもあれ、逝きたまふ御心に、御家の御事、御子様の御上、いかばかりか御心もとなく思召けんと、そののみ御いとほしく候をまだ幼なくいます御子の何げなき御声のきこゆるにも涙のみたへがたく候。やがて博士も御出にて候ひしがみだれたる心には御くやみの言葉も得申さず、ただしれ人の様にや候ひけむ。

御母君にねがひて、下の御座敷にまゐり、たてめぐらしたる屏風の中に入りつる時の心地。あはれ楠

緒の君などかく悲しき御様にはなり給ひし。今はた  
いづこにかいます。君を悲しび君をいとほしむ友の  
涙をしろしめすや、しろしめせとのみ、長く長くう  
つぶし居候ひしが、ああいかにそそぐとも、この涙。  
君をばかへさじ。かひなし、つらし。人のいふなる  
来ん世といふものあれ、再び逢ひまつらばや、あ  
ひまつりて心ゆくばかり共に語らばや、別るる期な  
き友ぞと思ひつつ御いとま申候ひしが、歸りて後も  
夢心地たへがたく候。今一度先生の御許にまゐり、  
猶心の限り泣きたく候へど、あまりの御さまたげと  
さし扣へ、かくは認め申候。思ふ事は胸にみちて、  
紙に向へば涙のみ。みだれたる筆のあとは、よしな  
に御判じいただき度候。かしこ。

十二日午後

ねられぬままに、窓おしあけて見出し候へば、す  
みたる空に、やうやう寒くなりゆく月の光しづかに  
みちて天地は眠りに入りたる様に候。此ねぶりたる  
天地の外遠き遠きいづこをかさして、楠緒の君はゆ  
き給ふ。残したまひし御子達の上に、この世に、御

思ひは猶あれど、誰が神か、かへり見ますなどおきてたるままに、ひたぶるに、はるばると一人いそぎ給ふにはあらかとしらぬ境まで思ひ候に、胸のみいたく、寒き風心にふき入るやう覚え候。窓さして机にむかひて、已にながく座し居候。ここに再び認め候をゆるさせ給へ。思へば楠緒君も私もまだ肩揚げの春に候ひき。先生の御許のかるた会にはじめて御目にかかり候ひしが、それより年ふるままにいよいよ親しく、わがかかるかたくなしく人になれがたき身をもようゆるして、常にやさしくし給ひしを、いつかは忘れ候べき。折にふれ、事につけて、わがいひがひなきを、御自らの様に口惜しがり給ひて、それとなくはげましきこえ給ひしもいく度ぞ。世にありてわが心しる人幾人にかあはむ。嬉しかりつる君が友情、今は悲しきかたみとなりはてて、涙のみやらん方なく候。思へば思へば口惜しくはかなくかひなき限に候かな。かしこ。

【入力者注】底本に行を合せるため、半角スペースを挿入した箇所があります。

底本：阪本幸男編著「橘糸重歌文集」短歌新聞社

平成二十一年(2009)年十月十五日発行

初出：「心の花」第十四卷第十二号

明治四十三(1910)年十二月一日

筆名：橘糸重子

入力：小林 徹

公開：令和四(2022)年十月六日

橘糸重【[散文作品集](#)】に戻る。